

編集委員長就任にあたって

証券アナリストジャーナル編集委員会

委員長 加藤 康之 CMA



証券アナリストジャーナルの編集委員長就任にあたりご挨拶申し上げます。

1963年に第1巻が発行された証券アナリストジャーナルは本年度で第60巻を迎えました。人間でいえば還暦を迎えたことになり、日本の金融証券市場とともに歩んだその歴史の重さを再認識しています。その間、本誌は日本の代表的な金融証券系ジャーナルとして、その時代の金融証券市場を代表する優れた論文、研究ノート、コラム、書評などを掲載し、多くの実務家や研究者の活動を縁の下で支えてきました。私も証券業界に入ってから大学の研究者となった現在に至るまで、最新の研究成果を学ぶために常に証券アナリストジャーナルとともにありました。また、私の論文も何回か掲載していただきましたが、証券アナリストジャーナルに採用・掲載されることは研究への大きなインセンティブとなってきました。

さて、私が現役の証券マンだったころは、ファクター投資が新たに登場し多くの論文が掲載されるようになりました。現在でも証券アナリストジャーナルの常連テーマになっていますが、その新しい進化にも期待しています。ここ何年かはESG投資が大きな注目テーマとなっており、多くのESG論文が登場しています。ESG投資は資産価格にも影響を与えるという研究もあり、さらに深い研究が必要になるのかもしれませんが。ESG情報については、その開示やデータベース化が急速に進んでおり、ESG研究の環境も整備されつつあり当面は目が離せません。直近（10月20日時点）では、32年ぶりの歴史的円安や40年ぶりのインフレなど経済構造が大きく変わろうとしており、同じテーマでも再度分析が必要に

なってくるでしょう。また、金融証券分析の方法論も大きく進化しています。AIやビッグデータの利用はその典型といえると思います。既存のテーマでも、分析に使われるデータの種類や量が著しく増加したり、分析手法にAIが使われたりしており、新しい研究成果が期待されています。この分野の進展にも注目したいと思います。さらに、ライフスタイルや産業構造に大きな変化をもたらすウィズコロナの時代となり、次の時代を見据えた全く新しいテーマの登場も期待されます。今、大きな変化の時代を迎えており、証券アナリストジャーナルで取り上げるべきテーマも多岐にわたりそうです。

ところで、総額で世界第2位の規模を誇る日本の個人金融資産ですが、その低い株式投資比率とその結果としての低い投資パフォーマンスは長年にわたって日本経済の大きな課題となってきました。少子高齢化が本格化し、生産年齢人口が減少するこれからの日本にとって、個人金融資産の適切な運用は最も重要なテーマの一つです。最近のインフレの兆候は、資産運用の重要性をさらに際立たせることになるでしょう。膨大な個人金融資産の有効活用、つまり、資産運用は日本の重要な収益源になり、インフレからの国民生活防衛にも資するはずです。また、資産運用業は国際金融センターを目指す日本の重要な産業としても期待されています。岸田政権でも「貯蓄から投資へ」が重要な政策として掲げられています。しかしながら、同様な政策はかなり昔から繰り返し導入されており、そして、それがなかなか機能してこなかったのが実情です。その原因にはいろいろあると思われませんが、その一つに金融教育の不足が挙げられています。国民の金融証券市場に対する理解が不足しているということです。本年度から高校で金融教育が始まりました。今後、金融教育を受けた若い人たちが社会の中にどんどん増えてきます。これら若い人たちが日本の資産運用を変えていってくれることを切に願っています。ところで、金融教育を国民の間に広く浸透させていくため、また、日本で高度な資産運用業を育成するためには、日本の金融証券研究の水準自体を向上させることも重要です。そして、証券アナリストジャーナルはその水準を高める責任を負っていると私は考えています。そのためには、日本の金融証券研究の国際的地位の向上も重要です。米国からの一方的な輸入だけではわれわれの水

準の向上は期待できません。双方向の交流も重要です。海外への戦略的な情報発信や海外主要機関との交流なども検討に値すると考えています。他にも課題は多々あるかと思いますが、皆様のご意見を十分お聞きしながら、対応していきたいと思ひます。

最後になりますが、川北前委員長を含め諸先輩たちが積み上げてきたこれまでの膨大な蓄積を踏襲し、今後も引き続き時代をリードする優れたコンテンツを読者の皆様にお届けしたいと考えております。幸い、本誌の編集部門は優秀な編集委員や事務局スタッフに恵まれています。自由闊達な議論を通して編集に取り組んでいきたいと思ひます。しかし、何よりも重要なものは、読者の皆様からのフィードバックとより多くの方からの論文投稿です。証券アナリストジャーナルは皆様に執筆していただく論文等で成り立っています。皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。今後とも証券アナリストジャーナルをよろしくお願ひいたします。